

感染症を鑑別したあとは？ 非感染性腸炎を見極める！

下痢や腹痛など腸管が原因となる疾患が多岐にわたることは、日常診療されている先生が実感されていることと思う。腸管の疾患としては、主に感染性、非感染性、腫瘍性に分類される。診断のステップとしてはまず感染症を鑑別することから始め、腫瘍についても確認していくが、感染でもなく腫瘍でもない場合その次の対処に苦慮することが多い。そのほとんどが機能的胃腸症や過敏性腸症候群などの非器質的疾患ではあるが、腸炎などの器質的疾患の場合がありその見極めが必要となる。特に、実地医家等での日常診療において検査が限られるなか、経過観察するか専門病院に紹介するかなどの判断が難しい。そこで本特集では感染症、腫瘍以外の腸炎に焦点を当て、いかに器質的疾患である腸炎の鑑別・診断を効率よく行うかということ念頭に企画した。

一言で腸炎といってもその由来が多様であるが、冒頭の項では医原性、全身性などの腸炎の由来を大別して解説していただいた。次項では器質的腸炎を見極めるための問診、身体所見、検査所見から、診断プロセスまで解説していただき、実際の診療現場で使える内容としている。各論では、診療現場で経験する可能性の高い疾患についてその詳細を解説していただいている。なかでも炎症性腸疾患については近年著しく患者数が増加していることから是非知識を深めていただきたい。一方で、炎症性腸疾患と類似する症状の疾患については炎症性腸疾患と誤診するケースも増えていることから、把握しておくべき疾患として各項目で解説いただいている。さらに難治性腸炎に対する最新の治療法も紹介させていただいた。いまだ臨床試験段階で開発中ではあるが、将来の実用化・汎用化に期待したい。

以上より、わが国を代表する消化管専門家の先生方による、分類・検査・疾患群と非感染性腸炎について網羅した1冊となっており、非感染性腸炎の理解を深める機会となれば幸いです。最後に、ご多忙のなかご執筆いただいた筆者の方々に厚く御礼申し上げます。

筑波大学医学医療系消化器内科
土屋輝一郎